

モスクワ大学派遣プログラム 報告書

分科会 A リーダー 東京外国語大学 英語科 1 年 青柳沙耶

感想

今回の日露青年交流プログラムは、日露青年交流センターの夏井様やモスクワ大学のサドーヴニチイ学長もおっしゃっていたように、画期的なものであったと思います。日本とロシアは「近いけれども遠い国」（勉強会での夏井様のお話より）であり、隣国であるにも関わらず今まで交流の少ない国でした。そんな二か国が今回 100 名もの学生の大規模な交流を行ったことは大変有意義なことであり、このプログラムをきっかけに日露間の学生交流が増えることを願っています。

日本から「近いけれども遠い国」であるロシアについて、日本人のほとんどは知識を持っていないように思います。私も例外ではありません。小学校から高校まではもちろん、大学でもロシアについて学ぶ機会はなく、このプログラムも「無料でロシアに一週間も行けるなら参加してみよう」という軽い気持ちで応募しました。

しかしこのプログラムに参加して、「なぜ私は今までこの国について学ぼうとしなかったのだろう」と疑問に思うほど、ロシアについてもっと知りたいと感じるようになりました。ソ連時代の印象からか、「寒い、人々が冷たい、怖い」などのイメージを持っている日本人は多いと思いますが、ロシアに実際に行ってみると、「寒い」というイメージ以外は（滞在中は記録的な寒波によって大雪に見舞われた日がありました…）誤りであることがすぐに分かります。プログラム中に関わったモスクワ大学の学生や先生方、街中で接したロシア人の方々は優しい方ばかりで、何より思っていた以上に親日的でした。プログラムを終え帰国した今では、日本はロシアとの関係をもっと重視するべきであると強く感じます。

反省

一番の反省は、ロシア語をまったく話せない状態でロシアに行ったことです。プログラム自体は日本語と英語で行われ、このプログラムの運営に関わっていたモスクワ大学の学生は日本語専攻の学生が多かったのでコミュニケーション自体に問題はなかったのですが、「ロシア語ができれば、この人ともっと深い話ができただろうな」と思うことは多々ありました。もしまたロシアを訪問する機会があれば、基礎的なロシア語を身につけてから行こうと思います。

もう一つの反省は、リーダーとしての不甲斐なさです。その日の内容が予定通りにいかなかったときにその場で適切な判断ができなかったり、発言の際に言うべきことを言わずに他の参加者の方が補足してくださったり、振り返ると反省点は数えきれません。プログラム参加者の中で最年少であったにも関わらずリーダーを任せてくださった同じ分科会の方々や、プログラム中にサポートしてくださった方々には本当に感謝しています。ただ、反省点は多いものの、分科会のリーダーをさせていただいたことで他の参加者と接する機

会が多く、自分とは異なる環境で勉強している方々から刺激を受けられたことはとても良い経験になったと思います。

来年の団員や日露交流に興味がある方に向けて

今回と同じ内容のプログラムが来年も開催されるかは分かりませんが、このプログラムの参加者として、今後日露交流を行おうと思っている方々にメッセージを書こうと思います。

今回、私がプログラムに参加して思ったのは、日本人とロシア人は全く違うように見えて実は似ている点が多いということです。私が一番感じたのは、感情表現の仕方です。ロシア人は普段あまり笑顔を見せず、これが「ロシア人は冷たい」と思われている理由なのだと思いますが、親しくなると本当に心が温かい方たちばかりです。日本人も喜びを思い切り体で表すことをしたりはしないので、内に秘めた感情が強い、という点がとても似ていると感じました。他にも、日本人とロシア人の国民性は似ているところがあるのではないのでしょうか。

今後、ロシアは日本にとって、今以上に重要な国になってくると思います。私は、日露間の青年交流が増え互いの国の理解が深まることで、「隣国だから関係を大切にしなければいけない」という表面的なものではなく、信頼に基づいた関係がロシアと築けたら良いなと思います。国同士のつながりは、利害関係に基づくことが多いように思いますが、信頼に基づいたものよりも強い二か国間の関係はありません。そして、二か国間の信頼の第一歩となるのが、青年交流なのです。日露交流に関わる学生が増え、日本とロシアが将来アジアにおける真のパートナーになるための足場を築いてくれることを心から願っています。